

「農」にまっすぐ

― 試行錯誤を手放さない

「世界で生き残るための攻めの農業を」「若者が希望を持てる強い農業を」。

日本がTPP交渉に参加を決める前後から、このようなスローガンをよく目にするようになった。そこで言われる攻めや強さは、具体的には、大規模化や効率化による生産性の向上ということになる。確かに日本の農業が置かれている状況は厳しい。高齢化により農業の担い手は減り、農村は疲弊している。

しかし一方で、国に心配されるまでもなく、若者たちは、自分たちの手で日本の農業を変えるんだ、と未来へ歩を進めている。

大学卒業の二年後に、耕作放棄地を農地として蘇よみがえらせる農業ベンチャーを立ち上げた西辻一真氏は、

「農業の発展は、生産性を上げることだけじゃない。

◀農くってそんなもんじゃないんです。

農と人を繋つなぐことができれば、日本の農業は変わっていく」と語る。

西辻氏のそのまっすぐな想いは、生きることを楽しむ、農の奥深い世界に支えられている。

農業発展の鍵は 楽しむ農くにあり！

いままで国は、農業の発展のためには生産性を上げなければならない、と大規模化や効率化を進めてきましたが、農業の発展というのは、生産性を上げることだけじゃありません。僕が起業した理由もそこにあります。

僕は物心ついた頃から、母親の家庭菜園をよく手伝っていました。小学生の頃には、土をふかふかにしたほうがよく育つ気がするな、とか、ジャガイモは深く植えたほうが大きいのが採れるのかな？ と、子どもなりに考えながら野菜作りに夢中になったのを覚えています。畑という場所が好きだったので、高校一年生のときには、通学路の途中にあった草ぼうぼうで荒れ放題の田んぼや畑を見ると、何で耕さないんだろうと、悲しいようなやりきれない気持ちで眺めていました。気が付くと、自宅の近所でも、似たような荒地

が増えていた。そこで初めて、耕作放棄地の存在を知り、背景にある問題について調べてみたんです。

直観的に、おかしいと感じました。人が生きていくには食べ物が必要なはずなのに、なぜ農地は耕されず、農家の人たちは苦しんでいるのか。なぜこんな仕組みになっているのか。どうしたらいいのか。どんどん出てくる疑問に自分なりに答えてみたいと思うようになっていました。

ですから大学は農学部を選びました。大豆の品種改良の研究をしていて、結構いい成果を挙げられたんです。ただしそれが、農家さんたちの役に立てるようになるのは随分と先の話でもありました。自分が何のために研究しているのかが分からなくなって、先生に相談をすると、「食糧危機が起きたときに、おまえの開発した、生産性を上げる技術で国を救える。生産性を上げ、農家の所得が上がることで農業人口も増える」と言われて、「えっ？」って

思ったんですよ。大学で行われている研究のほとんどは、生産性を上げるための研究だった。つまり農業の発展には、生産性を上げて、農家の所得を上げるしか方法はないというわけです。

でも僕の中には、「農ってそんなもんじゃない」という強い確信みたいなものがあつた。少なくとも、農業の発展のためには、作物を作る人を増やすことが先決じゃないか。農と人を繋ぐ仕組みを作ればいいんじゃないか。そう考えるようになりました。

人が何かをする原動力というのは、「儲もうかる」ではなくて、「楽しい」とか「面白い」といった根源的な欲求にあるはずですよ。僕が野菜作りに夢中になったように、「畑って楽しい！」という経験を提供できれば……と考えるうちに、あるとき、耕作放棄地のことを思い出した。耕作放棄地を、農を楽しむ場にすればいいんだ！ と。

大学を卒業した二年後、二〇〇七年に起業したときには、周りからはさん

ざん「無茶する」「道を外したな」と言われました。いまも言われています(笑)。確かに、耕作放棄地を使うビジネスはありませんでしたし、当初は、「耕作放棄地を使わせてください」と農家を何百軒と駆けずり回ってもまったく相手にされませんでした。

しかしいまは、体験農園の数は百カ所以上に広がっています。二〇一〇年からは、もっと農に関わりたい、あるいは就農したい人たちが週末に通える農業の学校、マイファームアカデミーもスタートさせました。現在は滋賀と大阪、東京、横浜、千葉でも運営しています。競合する企業も出てきました。競合が増えるのは大歓迎です。どんないいところを真似してもらって、市場が広がり、農業の魅力が伝わると思いますよ。

僕は起業したときからずっと、「自産自消ができる社会」をイメージしています。自産自消とは、自分で作って自分で食べる。現在、日本には専

業農家が四十万人います。日本の食を支えるために、専業農家を大規模化するのには一つの方法かもしれないけれども、残りの一億二千何十万人の人たちが、少しでも自分たちで作物を作れるようになるといい。そして、自分で作って食べる経験を通して、売られている野菜に疑問を持ったり、農の面白さを知ったり、ひいては生きるということを改めて感じたりする。そうした気付きが、さまざまな社会問題の解決に

めたくてやっているわけじゃないんです。最初に、誰に来てもらいたいのかと考えたときに、ご家族で来てもらいたいと思いました。となると、小さい子の横で、農業や化学肥料を撒くわけにはいかない。まず安全面から、使わないことにしました。



幼少期の西辻氏。この頃にはすでに農の楽しさの虜になっていた

次に、農業や化学肥料を使うと、「わからない」が減ってしまうから。土の中の微生物に関しては、いまだに全体の一パーセント程度のことしかわかっていません。九十九パーセントの「わからない」をテクノロジーでコントロールしようとする、すべての微生物を同定しなければならぬ。それではできないから、微生物の働きを無視して、「わかる」にしてしまえ、というのが、農業や化学肥料に頼るということです。有機農家さんが土づくりをいちばん大事にしているのは、「わからない」という農の醍醐味を楽しんでいるわけです。

仕事においても同じことが言えます

繋がっていくのではないかと考えているのです。この仕事をしていると、どこへ行っても、「農業って大変でしょ？ つらくないですか？」と聞かれますし、「農業は儲からない、厳しい」「初期投資に一千万円は必要」といった言葉もよく耳にします。僕がそのような固定観念に染まらずに済んだのはなぜかというと、簡単です。農家じゃなかったから。「業としての農」ではなく、家庭

よね？僕は社員から、「どうしたらいいのかわかりません」と言われると、「それってワクワクできるじゃない」と返します。わかりきった仕事なんてちつとも面白くない。自分で考えて変えていけるから面白いんです。

そして、オーガニックを選んだ三日の理由は、農業や肥料を使わない野菜の味を知ってほしいという想いからです。そこから、「スーパーの野菜と何が違うのか」と、疑問を持つてほしいとも思っています。

ここ数十年で、人々の関心が食の安全に向くようになったのはいいことではあります。オーガニックと書かれていけば何も考えずに買う人もいますし、オーガニックじゃなければ駄目と言う人もいます。僕もよく、「オーガニック主義者でいいですね」なんて言われます。でもその言い方はちょっと違う。農業が使われたトマトにしても、オーガニックのトマトにしても、自然栽培のトマトにしても、みんな元は同

菜園という「楽しむ農」から入ったからです。僕は八年目の新米農家ですが、当然、つらいともやめたいとも思ったことはありません。

「わからない」から面白い

体験農園では、オーガニックの技術を教えますが、オーガニックを広

じトマトです。農法や収穫時期や場所によって違ってくる、それぞれのおいしさを認め合うことが大事なのです。

おいしさも「わからない」ものの一つですね。例えば、トマトは甘味と旨味と酸味の三要素の組み合わせでおいしさが決まっている、というふうに野菜のおいしさを測ろうとする人たちがいますが、それはあくまで、人間が作ったおいしさの基準でしょ？ おいしさを均一化することはナンセンスです。一億二千万の人がいれば、一億二千万通りのおいしいがある。その事実を楽しまなきゃ！と僕は言いたい。

農法にしても何にしても、「答えは一つ」だと思っている人がとても多い。僕は、両親からダメだと言われたことがなくて、何か言うのと、「それも正解。でもこんな正解もあるよ」と教えられてきました。大学卒業後、農業の魅力を伝えるために情報の発信力を身に付けたい、と入社したネクスウェイという会社でも、「答えが正しいかどうか

はおまえの行動次第だ」とよく言われました。要は、自分の行動によって答えは変わると。僕は、いろんなところで答えは一つじゃないということを教わってきた。ですから社内でも、「それはダメだ。違う」とは誰にも言いま

せん。さまざまな答えがあるんだ、と意識することで、他の人の考えや色々な可能性が見えてくるのです。

マイファームアカデミーでも、何がやりたいのかを自分で選択してもらうことを大事にしています。僕らはその

マイファームアカデミーの授業風景

ために、原理原則と、さまざまな知見を提供するわけです。ですから、農業や化学肥料の授業、大規模生産に関する授業もあります。よく、年配の有機農家さんには、「おまえ変わったな。何で農業の授業なんかしているんだ」と言われますが、そんなときは、僕もまだまだ弱者者ですから、「敵を知らずして己を知ることなかれと戦国武将が言っていました」とやんわりと言いつたりしています。「そうか。じゃあ卒業するときにオーガニックを薦めろ」と言われますけれど(笑)。農業や化学肥料に関して知っておかないと、オーガニックを選んだときのフィロソフィーがなくなってしまうのです。

実は、農業においては、原理原則を教えるところはなかなかありません。なぜなら、農業は職人の世界と同じく、親父の背中を見て覚える過程に原理原則が織り込まれていました。ところがいまは、親父も息子もいなくなっている。また、たとえ指南書があつたとし



でも、別の土地で使えるとは限りません。例えば、千葉で生まれ育ってきた農家さんは、その土地しか知らないの
で、土の選択基準といった手前の部分
が抜けているのです。関東と関西でも、
粘土っぽい土もあれば、サラサラの砂
のような土もあつたりと、土の性質
はまったく違います。土地を選ぶとこ
ろから始めなければならぬ新規就農
の場合は特に、土の違いという原理原
則が分かっているといないと応用が効きませ
ん。ですからマイファームアカデミー
では、土の良し悪しを見られるように
する一方で、細かな職人の技術は大し
て教えない。作物と同じで、まずは原
理原則という根っこをしっかりと伸ば
すことを大事にしています。

自然が教えてくれる 「自分を变える」感覚

農というのは、「人間にはどうにも
ならないことがある」ということを体
で理解する場だと僕は思っています。

けですよね。ということは、米作りな
ら、代掻きして田植えて、といった
仕事を日数換算すると、たったの十四
日で終わります。あとの残りの日に、
いまのうちに鴨を放しておこう、とか
稲穂が垂れないように工夫をしようと
みんながやっていたら、お米の値段は
もつと上がっていたはず。ところが、
効率化だ、大規模化だという方向
に、あるいはもつと稼がなければ、と
田植えの時期以外は労働者として出稼
ぎに行ってしまった。どちらの仕事も、
自分が楽しくてやっているわけじゃな
いというのは本当にもつたいたい。農
家さん自身が、農の楽しみを手放して
きたようなところがあるのでしよう。
つまり、これまでの日本の農業は、
国のやりたい方向に農家を動かしてき
たわけで、農家が主体的に動いてきた
わけではありません。僕はそれをやめ
たい。農の良さの一つは、自分で考え
て試行錯誤できるところにあります。
だからこそ、僕は、農家さんたちが主

人間は、自然という動かせないものに
身を委ねるしかないんです。人間対人
間の場合は、お互いの速度というか、
相手の時間軸を早くしてもらうことも
遅くしてもらうことも可能ですが、対
自然の場合は、どんなに頼んでも変わ
ってはくれません。台風が来ると分か
つていても、その前に収穫できるかど
うかは、野菜の気持ち次第。僕は祈
る以外できないわけです。自分が合わ
せるしかない。自分が変わらない限り
は何も変わらないということです。そ
れを楽しめるかどうか、ですね。

一方で、人間対人間の場合は、自分
の欲求や考えが相手に拒否されること
があるけれど、自然の場合は拒否され
ることはありません。どうぞ、僕のお
腹の中で試していいよと言ってしてくれ
ている。ダメだったら自己責任です。こ
うした感覚は、昔であれば、農作業を
手伝ったり、自然の中で遊んだり子
どもの頃に身に付けてきたのだと思っ
ます。ところが僕らの世代ではそうし



体的に動けるように仕組みなり支えな
りを作っていくべきです。それは、
日本の農業が生き残る道だとも思って
います。もともと、日本の農業技術は、
世界でいちばん手間ひまをかけた、い
い作物を作れるものだと言っても過言
ではありません。その技術を、世界中
の人が学びに来るような仕組みを作っ
ていく必要があるのです。

た感覚を教わってきていない人が多い。
だから、すぐにイラツとしたり、わけ
もわからず人を刺したりするんじゃない
いでしようか。

このことは農家さんにも言いたい。
農業が登場したときに、みんななりふ
り構わず撒いたけれども、たとえたく
さん撒けと国に指導をされても、田ん
ぼなり畑の声を感ずるとい過程があ
るべきだったんです。

僕は、農薬や肥料については、お米
ならお米の気持ちになつてみることに
大事だと考えています。稲が、「嫌な
虫が来るやめてよー」と思っているだ
ろうなと感じたときには農薬を適宜使
います。ひよろひよろし過ぎていたら
いっぱい食べると言うように、肥料を
少し多めにあげてみる。指導されたか
ら撒く、ではなく、目の前の作物に向
き合つて、彼らがどう言っているのか
を感じ取らなきゃいけない。この感覚
を忘れちゃいけないんです。

農業は、自然が速度を決めているわ

三十年後を見据えて いまの自分ができていく

僕は三つの仕事しかしていません。
一つは、三十年先を見据えながら会社
の方向性を考えること。二つ目は、お
金を調達してこること。三つ目は、組
織の枠組みや戦略を立てること。なか
でも、一つ目の仕事をすぐ大事にし
ています。

「坂ノ途中」という農業ベンチャーを
やっている僕の後輩は、「未来にツケ
を残さない農業をしたい」と語ってい
ましたが、目先しか見てこなかったん
ですよね、これまでの日本は。最たる
ものだなと思ったのが、二〇二〇年の
東京オリンピック招致が決まった瞬間
から、みんなが「二〇二〇年を見据え
る」と言い出したこと。そんなに短い
の!?! どれだけ前が見えていないのか、
と改めて思いました。確かにこの国は、
目先の利益を積み重ねることで経済成
長を遂げてきました。しかしその一方



西辻 一真 にしつじ・かずま
1982年（昭和57）福井県生まれ。幼少期から家庭菜園に熱中する。高校時代に日本の農業問題に疑問を抱き、京都大学農学部資源生物科学科へ進学。2006年卒業後、株式会社ネクスウェイに入社。07年ネクスウェイを退社し、株式会社マイファームを設立。耕作放棄地を有機無農薬の体験農園などに活用するビジネスを全国で展開し、2010年からは、就農や農に関わる仕事をを目指す人を対象に、マイファームアカデミーを滋賀県に開校。現在は、滋賀のほか、大阪、東京、千葉、神奈川で運営している。2010年度農水省政策審議委員に就任。東日本大震災後は、塩害農地を蘇らせる土壌改良材の開発にも取り組み、成果を上げている。著書に、『マイファーム 荒地からの挑戦』（学芸出版社）がある。

で、多くの「ツケ」を残してきた。僕らはもうこれ以上「ツケ」を増やさないようにしないとなりません。

百年といったスパンだと、前提が変わっている可能性があるのではなかなか考えられないかもしれません。でも、三十年くらいであれば、具体的に考えられますよね？ 世界の人口は十億人に近づくのに対し、日本は一億人を切

ていると、年配の方の多くは、三十年先を考えてというよりは、いまの暮らしを最優先に候補者を選んでいけると言えるのです。

原発に関する議論にしても、三十年先の社会を見据えて、賛成派と反対派が対話していく必要があるはずで、三十年後というのは想像の世界です、正しい答えなんてありません。それを前提に、自分たちはどこに向かいたいのかを話し合うべきではないでしょうか。生きたい姿があつて、そこにみんなで行くことが大事だと思うんです。

最近になって、潮目が変わつたなど感じるの、やたらと高学歴の子がうちの面接に来るようになったこと。学歴は目安の一つに過ぎませんが、今まで何となく大企業に流れていた高学歴の子たちが、自分はどうな生き方したいのか、何ができるのかを考えて仕事を選ぶようになってきました。また、事業として伝統工芸の存続に取り

っているだろうな。地方はさらに疲弊しているだろう。でもちよつと待てよ、地方に行きたいのに動けない人がいるかもしれない。だったら地方に行きやすくなるような仕組みをいまから準備しよう。というように、三十年後の世の中を思い描くことで、自分の進むべき道が考えられるのです。

いまの日本で、三十年先を見据えて組んだり、目先の利益を追求してきた社会が見捨ててきた文化や、やりきれていない仕事を守りたいという人たちも増えてきました。

その一方で、「もうダメだよ、この国は」と海外に出て行く人たちも多い。世界を視野に活動するのはいいけれども、自分の国をダメだと言つてしまふのは悲しい。もつと言つと、「どうせ無理だよ」と無気力な人もいます。同級生と話していても、「別にやりたいこともないし、このままでいいや」と、川の流れに流されるように生きている人が結構います。そう考えていくと、いまの日本は格差社会ですね。お金ではなく意識の格差。

僕は、たまに社会起業家としてメディアで取り上げてもらつたりすることがありますが、自分が社会起業家だと思つたことはありません。思つた時点で終わりだという気がします。社会のためにいいことをしているんだ、なんてとんだ勘違いですよね。

語れる人はあまりいないんじゃないでしょうか。僕は日本中を飛び回っていますが、東京の人たちがいちばん顕著です。むしろ、地方のおじいちゃんおばあちゃんの方が、「わしが死んだ頃には世の中はこうなっているだろう」という話ができる。「おまえみたいな若いのが、三十年後、こんな世の中を作っていたらいい」なんて話は、東京でされたことがない。しても来年の話ですね(笑)。

そして困つたことに、世の中でいちばん目先のことしか考えていないのは、選挙で選ばれた人たちです。彼らの多くは選挙中にしか将来のビジョンを語らない。次の選挙で当選したいから、目先の利益をもたらすことに終始してしまうわけです。そういう人は投票で落とさなきゃいけない。だから、若い人たちの投票率が低いのは問題だと僕は思っています。若者が投票しないということは、年配の方々の票数で決まってしまう。これまでの選挙結果を見

僕は、社会問題を解決するために仕事をしているんじゃない。農を楽しみたい、耕作放棄地を畑として使いたい、という想いからスタートしたんです。その結果、社会が変わつていけばいい。そもそも、何が社会問題なのかということ、問い続けなければならぬことでもあります。

これからやりたいことは何ですか？と聞かれると、何から言えばいいのかわからないくらいにいっぱいあります。実際に、市民農園を経営する企業と共に新しい市場を作つていたり、教育やITといった異業種の人たちと新たな試みをしていたり動き始めている事業もありますし、地元である福井や東北でもやりたいことがある。起業してから、いや起業する前からずっと、僕は農にまつすぐ、を突き通してきました。たぶんこれから、農という懐の深くて大きな土壌は、僕を思いつき走り回らせてくれるはずですよ。